

2025年12月4日

## 報告書

### アメリカ学会 2025 年度大会に参加して

作成者：元山仁士郎

2025年11月20日から22日の三日間、アメリカのプエルトリコ・コンベンションセンターで開催されたアメリカ学会（ASA）2025年度大会に参加した。プエルトリコは11月でありながら最高気温が30℃前後と暑く、滞在中は半袖で過ごすことができた。夜間にはスコールのような強い雨が一時的に降ることもあったが、学会参加に影響はなく、全体として快適に過ごせた。会場周辺にはホテルやカジノ、映画館、レストランが立ち並び、同時期には小中高生のバスケットボール大会も開催されていたことから、人々で賑わっており、学会会場は活気を帯びていた。

私は、22日最終日の午前9時45分から11時15分にかけて開催された分科会で研究報告を行った。当該セッションのテーマは「戦後の人種的自由主義：ミシシッピから沖縄まで（Postwar Racial Liberalism from Mississippi to Okinawa）」であり、私のほか、アメリカの大学に所属する加藤慶氏、玉井美香氏、阿部啓氏の計4名が登壇した。司会はスペルマン大学のパトリシア・ヴェンチュラ教授、コメンテーターはカリフォルニア大学デービス校のジュリー・ジー教授が務め、それぞれ専門的かつ建設的なコメントを寄せてくださった。

私の報告は「米国の核作戦計画と沖縄（U.S. Nuclear Operation Plan and Okinawa）」と題し、博士論文の中心部分を基礎に構成したものである。本報告は、従来の研究が当然視してきた沖縄の「軍事的有用性」を、米軍の軍事関連史料に基づき再検討し、その歴史的・戦略的役割をより具体的に捉え直すことを目的とした。また、1972年の沖縄施政権返還に際して核兵器の撤去先がどこであったのかについても、既存の議論には十分に触れられてこなかった観点から新たな分析を加えた。質疑応答では、核作戦計画の策定において科学者がどのような役割を果たしたのかについて質問が寄せられ、史料に示される科学者や軍事専門家の関与事例を紹介しながら回答した。セッション後も、米国核戦略とアジア・太平洋地域の関係性を捉える発展的研究の可能性を指摘したアドバイスもいただくことができた。

セッション後には、国際的な研究者と大学院生を対象としたレセプションにも参加した。ここでは同じ分科会で司会を務めたヴェンチュラ教授をはじめ、多様な背景を持つ研究者や学生と交流することができた。今後の学会や若手研究発展に向けて示唆に富む情報交換の機会を得られた点は非常に有意義であった。

また、報告日前にプエルトリコへ到着したことから、短時間ではあったが世界遺産に指定される旧市街地オールド・サンファンを訪れることができた。植民地時代の城塞や色彩豊かな建物が立ち並ぶ街並みは歴史的魅力に溢れており、学会参加の合間とはいえ貴重な文化的体験となった。市内のバスは無料で便利ではあったが、Google Mapの表示通りに到着する場合もあれば、2時間待っても来ないこともあり、結局のところUberやLyftを併用することが多かった。

最後に、今回のアメリカ学会大会への参加は、日本アメリカ学会の海外渡航奨励金によって実現したものである。国際的な学术交流の場に参加し、研究を深める機会を与えていただいたことに対し、ここに改めて深く感謝申し上げます。今回得られた経験とフィードバックを生かし、今後の研究を一層発展させていきたい。



(写真1) セッションの様子 (2025年11月22日)



(写真2) 現地参加の発表者とともに (2025年11月22日)

## Report on the 2026 OAH Conference on American History

Mika Endo

George Mason University

I arrived in Washington, D.C., on April 11 and conducted archival research at the National Archives and Records Administration (NARA) in College Park, Maryland, for three days beginning on April 13.<sup>1</sup> During my archival research, I examined the folder titled “Selective Service System Central Files, 1940-1947, Record Group 147.” This folder contains correspondence regarding the racial classification of the “non-white” categories during draft enlistment for World War II. I am particularly interested in debates concerning the racial status of Indians in Virginia. The Selective Service System classified Indian men according to the Racial Integrity Act of 1924, which defined a white person as one “who has no trace whatsoever of any blood other than Caucasian.”<sup>2</sup> Indian men and their tribal communities, however, resisted being categorized in “colored” military units. Virginia Indians did not automatically fit into the Black-white categorization, and thus, complicated the registration process during the enlistment.

On April 16, I arrived in Philadelphia to attend the 2026 OAH Conference. The title of our session was “Indigenous Geographies,” which examined how Indigenous peoples have mapped, inhabited, and reshaped political space across the nineteenth and twentieth centuries. My presentation, titled “Indigenous Identity, Place, and Belonging in Virginia,” contributed to the discussion by examining the implementation of the Racial Integrity Act of 1924, as well as the damage to tribal communities that continues even today.

I discussed Walter Plecker, the state registrar at the Virginia Bureau of Vital Statistics from 1912 to 1946, and how he imposed his own racial standards within Virginia’s strict biracial framework. Plecker believed that there were no “pure” Indians, and he denied Native Americans the right to claim their own independent racial identity. He ultimately erased “Indians” from official records, including birth and marriage certificates. Even years later, Plecker’s campaign against American Indians continued to make it difficult for the tribes to gain their independent racial status. Plecker’s legacy was the primary factor in delaying and complicating the federal recognition of Virginia tribes in recent years. By reflecting on the lasting impact of the Racial Integrity Act on the tribes, I argued that the 1924 law transformed how Indigenous peoples connect with their communities and how they relate to their place. Our session was featured on the OAH website under “[Friday Highlights of OAH 2026](#).”

---

<sup>1</sup> My research trip was changed and shortened from the original schedule due to my teaching responsibilities in Japan.

<sup>2</sup> Brendan Wolfe, “Racial Integrity Laws (1924–1930),” *Encyclopedia Virginia*, published December 7, 2020, last modified February 18, 2025, accessed May 7, 2026, <https://encyclopediavirginia.org/entries/racial-integrity-laws-1924-1930/>.

During the conference, I also visited several book exhibits to introduce my book project to press editors. As I am currently drafting an outline and manuscript for a book proposal, this was an excellent opportunity to meet with the editors and discuss my project.

Finally, I would like to express my gratitude to the committee members of the Japanese Association for American Studies (JAAS) for providing financial assistance that enabled me to continue my research and present my work at the conference. I am also grateful to my colleagues and fellow JAAS members who presented in the session with me, as well as to those who attended my panel and offered valuable comments on my work.

## 参加報告書

臺丸谷 美幸

(国立研究開発法人水産研究教育機構 水産大学校)

アメリカ学会海外渡航奨励金の助成により、2026年 Association for Asian Studies (AAS) の年次大会に参加した。当会はアジア学を広く扱う学会であり、米国ミシガン州に事務局を置き、2026年で創立85周年を迎える。今年の年次大会は、2026年3月12日から15日の4日間の日程で、カナダのブリテイッシュコロンビア州バンクーバーで開催された。会場はダウンタウンのウォーターフロント地区に所在するバンクーバー・コンベンションセンターを主な会場とし、Fairmont Waterfrontなどの近隣ホテルでも同時に行われた。参加者数3,904名(学会発表)という大規模な大会であった。

旅程は次の通りであった。3月10日に山口県下関市を出発し、福岡国際空港から韓国・仁川国際空港に同日着。乗り継ぎのため仁川市内に前泊、翌11日に韓国より出発し、カナダ時間11日午前バンクーバー国際空港に到着した。以降、帰国日までバンクーバー市内に宿泊した。

大会初日(12日)は、映画上映セッションやKeynote Addressに参加した。2日目(13日)も続けて複数のセッションに参加した。特にオーラル・ヒストリーをテーマとするセッション(“Oral History Across Borders: Practices and Reflections from East Asia and the United States”)は、報告者の研究関心とも近く、インタビュー手法を基とした各国のエスニック・マイノリティの軍隊参加に関わる研究に触れ、意見交換できたことは大きな収穫であった。

3日目(14日)はポスターセッション(#7)にて“Japanese American Nisei Soldiers in the Korean War in Transnational History”と題する自身のポスター発表を実施した。本発表は、朝鮮戦争(1950-1953年)に従軍したカリフォルニアの日系アメリカ人兵士を対象とし、米国・朝鮮半島・日本にまたがるトランスナショナルな経験を通じて、彼ら日系退役軍人のアイデンティティが従軍前後でいかに変容したのかを明らかにすることを目的としたものであった。発表には20名以上のオーディエンスを迎え、質疑応答・意見交換を通じて、研究内容を紹介するだけでなく、新たな知見や情報を多く得ることができ、非常に充実したものとなった。

最終日(15日)午前は引き続きセッションに参加し、すべての学会プログラムが終了した。午後は学会のエクスカージョンで、バンクーバー市内のチャイ

ナタウンにある中華系カナダ人博物館（Chinese Canadian Museum）を見学した。僅かな時間ではあったが、バンクーバーの中華系移民の歴史、中華系カナダ人の軍隊参加の歴史に触れることができ、今後、朝鮮戦争期のアジア系アメリカ人の参戦史の考察を深化するにあたり、大いに参考となるものであった。

翌16日午前バンクーバーを出発し、往路と同様に韓国仁川での後泊、翌日の乗り継ぎを挟み、日本時間18日午後福岡国際空港着、同日下関の自宅へ帰着した。

今回の年次大会を通じて、北米におけるアジア研究およびアジア系アメリカ人研究の最先端の動向を知り、見聞を深めることができた。また、自身のポスター発表を通じて、多様なバックグラウンドを有する参加者と深い議論を交わすことができた。今後は、本大会で得た知見を踏まえ、論文執筆を含む新たな研究活動へと発展させていきたい。

最後に、本大会への参加にあたり多大なるご配慮を賜ったアメリカ学会国際委員会の皆様ならびに関係各位に、厚く御礼申し上げます。



大会3日目：報告者のポスター発表の様子（右奥後ろが報告者）